

# 論壇

## 現状変化を嫌う傾向

今年のノーベル経済学賞はシカゴ大学のリチャード・セイラー教授に授与された。行動経済学の研究の成果が評価されたものだ。セイラー教授は、私が留学したロチェスター大学の先輩で、当時よく学内で見かけたので懐かしい。その行動経済学の主張は、人間の行動は合理性だけでは説明できない。ただ、全くのデータメな行動をするというのではなく、ある種の行動パターンの癖を持っている。その癖をきちっと見極めることで、経済現象を理解することが

元重 伊藤 (国際経済学) 学習院大教授

可能になる、というものだ。

セイラー教授の本の中に出てくる例が分かりやすい。オランダの空港での話だ。空港の男子用の小便のトイレで、外に漏らす人が多くて、掃除の人が困っていた。そこで、便器の真ん中に虫の絵を描いてみた。そうしたら多くの人は

らすという課題解決を実現したというわけだ。

さて、行動経済学はさまざまな指摘をしている。その中でも特に重要なのは、現状から変化することを嫌う人が多いということだ。例えば、100万円の所得の増加があることの喜びより、80万円の

## 行動経済学と保護主義

虫めがけて小便をするようになり、トイレの外に漏れる小便の量が大幅に減ったようだ。

虫の絵をめぐって小便をすることは合理的でもなんでもない。ただ、なんとなく多くの人はそうした行動をとるようだ。その行動の癖を利用して、トイレの汚れを減

所得減の痛みの方が大きい人が多い。所得が増えることの喜びはそこそこだが、所得が減ることの痛みは大きいということだ。

最近、世界のおちこちで起きてくる保護主義の動きは、こうした行動経済学が指摘する現状維持志向と関係があるように思われる。

## 右翼政権成立後押し

グローバル化が進むことで、豊かになる人も少なくない。しかし、多くの人にとっては、グローバル化によるそうしたプラスの変化の恩恵よりは、グローバル化によって自分たちの生活が変わってしまったマイナスの変化の方が大きく見えるようだ。

外国から大量に安い製品が入ってきて産業基盤が崩れた米国の中西部の人たちは、保護主義的な政策を打ち出したトランプ大統領を選んだ。生活を変えてしまったグローバル化への彼らの怒りは、グローバル化によって豊かさを増した東部や西部の人たちの声よりも大きかった。

最近では、欧州のオーストリアで移民排除を明言する右翼政党の党首が首相になった。移民が大量に入ってきて自分たちの国で自分たちが少数派になることは耐えられないだろう、というスローガンで多くの票を集めたようだ。欧州への急激な移民の増加で自分たちの生活が大きく変わることを恐れた人たちの票が右翼政権の成立を後押しした。

グローバル化が進めば、変化に対する反発の保護主義の声はますます強くなる。そうした気持ちから分らないわけではないが、過去の歴史を見ると、保護主義によって国も経済もよくなることはない。保護主義がこれ以上に広がらないことを願うばかりだ。

\*この記事は静岡新聞社編集局調査部の許諾を得て転載しています。無断転載、複製を禁じます。